

金丸 雄一

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための予備調査・研究活動

2. 実施場所

新潟県新潟市および佐渡市

3. 実施期日

2022 年 9 月 10 日 (土) ～ 2022 年 9 月 19 日 (月)

4. 成果報告

●事業の概要

本事業は、博士論文「日本列島における海士・海女の民族誌的研究」執筆のための予備調査が目的である。報告者は、現在、「環境変動におけるアマの適応」をテーマに研究を進めており、三重県志摩半島での定点的／集約的調査にくわえ、黒潮流域以外のエリアにて比較調査をはじめている。本事業では、日本海側海洋環境の把握を目的として、**新潟大学佐渡自然共生科学センター臨海実験所**にておこなわれた**公開臨海実習「佐渡・海洋生物多様性実習」**の参加を計画し、完遂した。併せて、その行程のなかで、海岸環境や海にかかわる博物館展示の視察や郷土資料の調査をおこなうことを目論み、これを実施した。これらを通じ、1) 太平洋側と異なる磯の生き物の生態と分布様式、2) その海岸環境のなかでの海村の人びとの暮らしや生業を、調査／研究した。

本事業は、2022 年 9 月 10 日から 2022 年 9 月 19 日にかけて実施した。以下が行程である。

<9 月 10-11 日：新潟市内にて調査>

- ・新潟市内の 2 施設 (**新潟市水族館 マリンピア日本海**、**新潟市歴史博物館 みなとぴあ**) にて、視察と資料調査をする。前者では信濃川水系の固有の生態系、後者ではサケ漁や水田漁撈に関する漁具の展示解説などがあった。後者の所蔵品には、新潟藩初代奉行の川村 <sup>ながたか</sup> 修就 が配下に描かせた絵巻「蟹の手振り」があり、これに着想を得た映像作品「あまのてぶり」がホール上映されていた。「蟹」=アマは、もともと漁民をさす語であり、この絵巻には近世の新潟町漁民の暮らしぶりが実に写實的に綴られている。
- ・**新潟県立図書館**では、郷土／民俗研究の資料の調査をする。

<9 月 12 日：佐渡汽船にて、新潟港から佐渡へ>

- ・**佐渡ジオパークセンター**にて、展示の視察。地質学的分析による解説のみならず、貝立層から出土した貝化石 (寒流系の種) などの展示もあり、現在との比較の指標となる資料があっ

た。

<9月12日午後～17日午前：新潟大学佐渡自然共生科学センター臨海実験所にて公開臨海実習>

- ・このプログラムは、「日本全国の<国立大学法人臨海臨湖実験所長会議>に属する各実験所・センターが、全国の大学生／院生を対象に開講する<公開臨海臨湖実習>」（同会議発行『公開実習ガイド』より）である。「佐渡・海洋生物多様性実習」のプログラムは、以下である。
  - ① 講義「佐渡の海の特徴と海洋生物の多様性」
  - ② 生物採集 i 夜間の生物の灯火採集と観察 ii シュノーケリングによる磯採集  
iii 船上からプランクトン採集 iv 砂泥海岸でのドレッジ採集
  - ③ 採集した生物 i～ivについて、実験室内での観察／同定／スケッチ  
\*おなじくムラサキウニの受精と初期発生についても観察／スケッチ。
  - ④ 岩礁帯での生物群集の帯状分布調査（チームごとの、巻き尺によるライン取り調査）  
そこで採集した生物の分類／同定／データ解析
  - ⑤ 口頭発表
  - ⑥ 海岸地形の視察（陸繋島である大野亀や海に差し迫った大佐渡山地）

<9月17日午後～18日午前：佐渡島南部の視察へ>

- ・佐渡南部の集落に点在する「たらい舟」3施設を視察する。施設のそばでは、現代のイソネギ漁（箱メガネによる覗き見漁／貝突き漁 \*志摩のアマにもおこなう者あり）でもちいるFRP製たらい舟も港にあった [写真4]。船頭みずからが作った、たらい舟が並ぶ施設もあった [写真5]。
- ・佐渡国小木民俗博物館では、民俗学者・宮本常一の薫陶を受けて地元郷土史家らが集めた民俗資料を視察した。大正9年築の旧宿根木小学校が本館の建屋であり、となりの展示館とともに、多岐にわたる分野の膨大な資料が壮観である。国指定重要有形民俗文化財となっている「南佐渡の漁撈用具」「船大工用具及び磯船」が所狭しと並べられ、この地の生業の重層性を力強く語っていた。イソネギ漁に「はんぎり」たらいを最初にもちいた、「はんぎり漁」発祥の地である白木もほど近く、その漁具の展示が充実している。ワカメガマからヤス（サザエヤス／タコヤスも）、アワビ採捕のためのケイカギやケイベラ、エゴノリ採集にもちいるイゴトリまで、さまざまな採具が並んでいる [写真6・7・11]。アマ漁でもちいる採具と同形状がみられる。

<9月18日午後～19日：佐渡汽船の出発前に、両津町へ戻り視察。その後、帰路へ>

- ・両津郷土博物館にて、国指定重要有形民俗文化財「北佐渡の漁撈用具」を視察した。両津湾と加茂湖、海府で使われてきた漁具（延縄漁や<sup>だいぼうあみ</sup>大謀網、磯漁まで）である。イソネギ漁については、延縄技術の伝わる前から佐渡の主要な漁法であることが言及されており、その漁具の展示解説も組まれている [写真8・9・12]。

## ●本事業の実施によって得られた成果

本事業によって、佐渡島から越佐海峡（新潟—佐渡間の海峡）における海洋環境を本格的に調査するための第一歩を築けた。本来、報告者の研究は、人文学からの視点（生態人類学と民俗学、水産地理学を統合した視点）である。そこに自然科学的視点をくわえ、より重層性のある調査ができる可能性を獲得できたことが、最大の成果である。これをひとつのケースとして、今後の研究における比較調査に向け、以下の3つの視角をもつことができた。

第1点として、新潟から佐渡という研究フィールドの魅力である。とくに佐渡島という島嶼環境が、さまざまな観点から研究フィールドとして集約的であることは、特筆に値する。日本初の世界農業遺産（農薬なしの農法をもちいた棚田とトキの関係がみられる）に認定され、日本ジオパーク認定を弾みに世界ジオパークを目標とし、UNESCO世界文化遺産の登録をめざしていることは、報道でも周知のことである。このように、自然環境と人間の営みとのかかわりが深いのが佐渡である。

ひとつの島に海洋／森林／里山という3つの生態系がコンパクトに存在し、調査地としての優位性が高い（研究において機動力を発揮できる）。海岸地形ひとつとっても、海食台・荒磯・転石海岸・砂浜海岸・陸繋島・汽水湖と、さまざまな自然環境が集約的に存在している。そのような条件の違いを踏まえて海村における生業複合を可視化し、漁民の経済活動を調査することができる可能性がある。小木や両津をはじめとする各ムラには、島の風土や民俗を伝える重要な郷土資料が残されており、佐渡の磯漁（アマ漁をふくむ）を縦軸／横軸から見つめることができるかもしれない。

第2点として、本事業での実際の生物の採集をとおして、日本海側の海洋環境の特性（たとえば透明度20m以上の日が多かったり、干満差が少なく潮間帯や干潟が発達しないこと）について身をもって知ることができた。特に、干満における潮位の変動の少なさ（調査日は潮位差の大きい中潮にもかかわらず昼の干満差20cm）を、みずから潜水して体感できたことが収穫である。報告者の主要調査地である志摩半島では、同日の潮位差が140cm強であり、まるで違っていた。

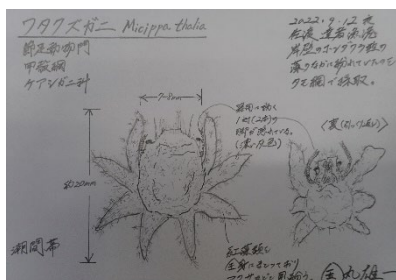
定着性生物資源も干満に応じての移動が少なく済むことから、実習海域ではまさに“小型貝類の揺りかご”の様相を呈していた。若干のクロアワビ個体があったものの、圧倒的におなじミミガイ科のトコブシや小型巻き貝の宝庫であった。他方、海藻資源については、多年藻のコンブ科海藻（カジメなど）は見つからず、一年藻のホンダワラ類と紅藻類の繁茂の確認にとどまった（もちろん、これらは特産品であるギンバソウやイゴネリ〔写真10〕となっている。佐渡沿岸の全容の把握は今後となる）。

報告者は、対馬暖流とリマン海流（寒流）の交わる豊かな海洋生態系を背景とした、越佐をはじめとする北陸沿岸の磯漁（アマ漁をふくむ）の共時的特性と近年の変化の動態を、これを機に把握していきたい。漁期でないため調査できなかった少数の潜水漁師がいる佐渡市相川町から、アマが確実にいる新潟県柏崎市や山形県村上市、福井県坂井市なども比較調査の視野に入れている。

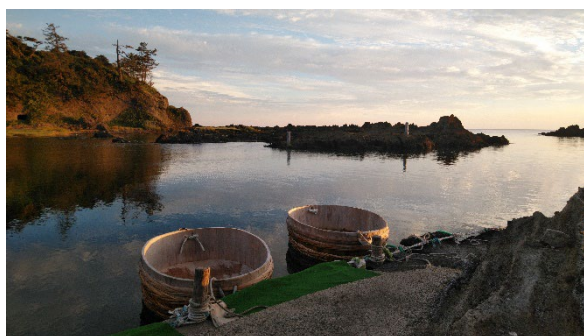
最後の第3点として、このような文部科学省「教育共同利用拠点制度」である臨海臨湖実験所を活用することの利点である。報告者の研究には、日本列島にあるアマ集落の縦断的／俯瞰的な比較調査が求められている。各臨海実験所のそばに調査地がある場合には、所属する研究者たちから当該施設付近の海洋環境の把握や調査への指南が得られる可能性が大きい。まさに今般の事業がそうであり、今後の調査のありようにひとつの幅を与えてくれるほど、実り多い成果を得られた。

●本事業について

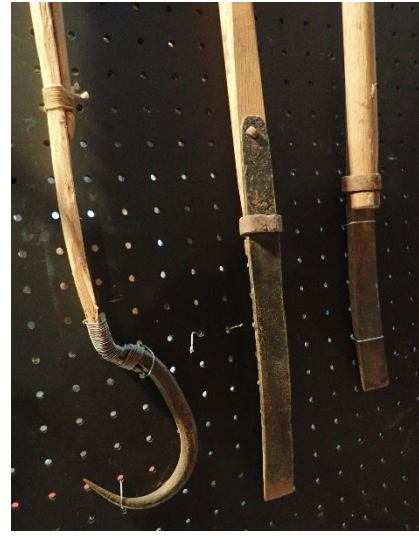
本事業により、博士論文執筆のための比較調査が実施できた。経済的な援助のみならず、今後の研究と論文執筆の見通しのうえで大いに進展を得られ、今般派遣を認可していただいたことに深く感謝の意を表したい。専攻の先生方および事務ご担当の皆さまに心より御礼申し上げます。



(左より順に) 写真1 達者集落の岸壁にてタモ網で採集したワタクズガニ  
 写真2 ワタクズガニと同定し、報告者が描いた生物スケッチ  
 写真3 おなじ岸壁にて報告者が採集した紅藻類 (テングサのナカマ)  
 \* 写真3点とも、すべて筆者が撮影。  
 \* エゴノリなど紅藻類は、日本海側アマの貴重な収益源となる。



(左より順に) 写真4 矢島・経島の港にあった漁業用 FRP 製たらい (塗装し広告目的に転用)  
 写真5 宿根木の施設で用いられている 船頭お手製はんぎり  
 \* 写真2点とも、すべて筆者が撮影。



(左より順に) 写真6 佐渡国小木民俗博物館のイソネギ漁の展示解説  
 写真7 同展示のケイカギとケイベラ (写真中の右2点)  
 \* 写真2点とも、すべて筆者が撮影。  
 \* ケイベラは、アマの採具と同形状をなす。



(左より順に) 写真8 両津郷土博物館のイソネギ漁の展示解説 (右端に三枚ハギのコブネ)  
 写真9 同展示のタコサグリヤス (写真中央上) とアワビカギ (写真中央下)  
 など  
 \* 写真2点とも、すべて筆者が撮影。



(左より順に)

写真 10 佐渡の郷土料理のイゴネリ

写真 11 木製サザエヤス (佐渡国小木民俗博物館)

写真 12 鉄製サザエヤス (両津郷土博物館)

\* 写真 3 点とも、すべて筆者が撮影。

\* 木製や竹製はサザエを傷めず、鉄製は  
深場での使い勝手がよい [展示解説]。